

野添憲治著

『労農運動に生きる』

秋田の先覚者たち』

評者：吉田 健二

本書は、1920～30年代、秋田県の労農運動を担ったリーダーや社会運動家の足跡を証言や対談などでまとめたものである。この時期は普選が実施され、さらに未曾有の不況 恐慌とも重なって、秋田県でも労農運動が高まった。著者は、この時期の秋田における社会運動家の「きたえぬかれた生き方」（あとがき）にうたれ、本書を上梓したという。

なお著者は能代市にあって、中国人・朝鮮人の強制労働など権力に虐げられ、あるいは時代に翻弄されて苦悩する人間に焦点をあてて日本現代史の“暗部”に切り込む社会派のルポライターとして知られる。著書は『出稼ぎ』（1978年）、『証言・花岡事件』（1986年）、『劉連仁・穴の中の戦後 中国人と強制連行』（1995年）など20冊に及ぶ。

*

本書は、とりくまれた運動の概要を紹介しながら、これを指導した社会運動家の思想や人間像を描き出す形でまとめられている。

本書は4章で構成され、第1章の阿仁前田小作争議では可児義雄について、第2章の一日市小作争議では畠山松治郎と近江谷友治を紹介している。第3章では小作争議をのぞく社会運動が扱われ、北方教育社を設立してのち戦時期の生活綴方運動をリードした成田忠久、労働農民党のリーダーだった棚橋貞雄、第3回芥川賞の

受賞者で労農芸術家連盟のメンバーだった鶴田知也、文芸誌『路傍』を主宰した中川篤三郎、の4人を扱っている。

そして、第4章は『『種蒔く人』と金子洋文』のタイトルで、NHK秋田放送局が1971年2月25日に放映した金子洋文と著者の対談『『種蒔く人』から半世紀』と、著者を聞き手とする金子の証言『『種蒔く人』とその周辺』を収録している。

さて、著者が阿仁前田小作争議や一日市小作争議に一節を付している「概略」は、断りが無いが共著『小作農民の証言』（1975年）からの転載であって、本書は、必ずしも先行研究の成果をいかす形で仕上げられていない。その他の社会運動についても、鶴田友也や中川篤三郎の二人をのぞいて、多くは今野賢三の『秋田県労農運動史』（1954年）が既述しており、本書により、近代秋田の労農運動の通史が修正されることはない。

この点は、金子洋文の『種蒔く人』に関する証言も基本的に同じである。本書は評者にとって期待の書であったが、一読の結果はいささか落胆を禁じ得ない。

労働争議や小作争議の場合、分析の基本軸は労資関係、あるいは地主小作関係という階級的・イデオロギー的な枠組みにおいてなされ、社会運動家の志や人間性が分析・紹介されることは特別の事情がないかぎり少ない。

むしろ本書で評価されるのは、証言により社会運動家の足跡とその人間像を明らかにし、これまでにない形で近代秋田の労農運動の一面を描いていることだろう。

とくに評者にとって興味深かったのは可児義雄と棚橋貞雄のオルガナイザーとしての資質・器量だけでなく、その人間性や人間としての魅力を引き出していることである。

可児は、1921年4月の足尾銅山ストの中心オ

ルグで、23年7月から秋田県小坂・花岡鉱山の煙害賠償争議を指導して勝利に導き、阿仁前田小作争議でも日本鉱夫組合主事の肩書で指導にあたった。可児については、かつて麻生久が社会正義の希求、その素直で誠実な人柄を称賛したことがあった（高梨二夫『同志可児義雄追憶集』1935年）。本書によれば、可児はまた労農同盟を争議戦術の基本として、「人の喜びを自分の喜びとする」まれにみる人間愛に満ちた人物であった（第1章）。

他方、棚橋は秋田普選連盟や政治研究会を結成し、1926年には東北で最初のメーデーを秋田で組織し、秋田合同労組や労働農民党県連の結成を主導するなど左派の中心的なリーダーだった。同時に、棚橋は日本共産党にも入っていた二重党籍者で、1928年の3・15事件で検挙されて以降、その活動は知られていない。本書は、その棚橋が、労働者と農民に深く根を下ろし、尊敬と信頼を得ていた事実を紹介している（第3章）。

成田忠久、鶴田知也、中川篤三郎を秋田における労農運動の潮流のなかで位置づけ、その足跡と人物像を明らかにしていることも評価されるだろう。

1921年2月小牧近江・金子洋文らの『種蒔く人』の創刊が近代秋田における労農運動の幕開けとなっているように、秋田の労農運動は文化的な要素と広がりをもって展開されていたところに特徴があった（第2、4章）。とくに中川については、著者が今回初めて発掘・紹介したもので、戦時体制下の左翼出版事情について学ぶ評者にとっても初めて知る人物だった。

*

秋田県の労農運動については『秋田県労農運動史』（前出）や、県労政課の『秋田県労働運動史』（第1巻、1986年）においてその全容を知ることができる。近年、個別テーマの研究も

進展し、たとえば『種蒔く人』については、小牧近江ら種蒔き社の同人の思想形成と実践をクラテ運動や第三インターナショナルとの関連において分析がなされている（北条常久『「種蒔く人」研究』1992年）。

本書は、1920～30年代に秋田の労農運動をになったリーダーや社会運動家の足跡を紹介しながらその人間像を描いており、これまでとは違う労農運動史となっている。いわば『人物で綴る秋田県労農運動史』の趣をもつといつてよいかもしれない。

また、本書に収録の証言のうちには、評者自身、深く考えさせられた言及があった。その一つは、金子洋文が青野季吉の転向について言及した箇所、金子は「転向書なんかなんぼでも書けばええんでがい。出てきてまだ運動をやればええのでねがい。日本人の...清癖さと愚かさだと思うんだ」（161頁）と述べていたのであった。青野も種蒔き社の同人で、労農芸術家連盟でも金子や鶴田知也らと活動を共にした経過があった。金子は、転向を「変節」や「脱落」としてこれを批判的に問題にする従来の転向研究の傾向に疑問を呈し、かつ“偽装転向”の形をとった非転向者の問題の検討を提起している、と評者は理解する。

なお、転向問題との関連で、棚橋貞雄についても一言しておきたい。棚橋が3・15事件で検挙されたことについては先に述べた。著者は、棚橋が転向を表明して出所し、この直後に東京に転居して木材通信社に就職したことを半ば「脱落」として紹介し、さらに、この時点で「貞雄は内部的に転向していたのではなかろうか」と非難のニュアンスで書いておられる（109～110頁）。

棚橋が勤める木材通信社は実は、1935年3月に日本共産党が壊滅したのち、その再建をめざす再建準備委員会（いわゆる第1次日本共産党

再建指導部)の拠点であった(拙稿「雑誌『機械工の友』と『機械工之知識』(3)」,本誌第441号,1995年8月)。

この木材通信社は倉持善三郎を社長に岡部隆司,石黒周一ら10数人が勤めていたが,第1次党再建指導部の中心人物はコミンテルンとの連絡ポストを担っていた岡部であり,石黒であった。川添隆行氏によれば,同社は「日本共産党が消滅したのち共産党員の隠れ蓑」「日本共産党の再建運動」の拠点となっていたのである(法政大学大原社研編『証言・産別会議の運動』2000年)。川添氏もこの木材通信社の社員で,記者を装いながら一時期,日本共産党の再建運動をおこなっていた。評者は著者の棚橋に対する記述や評価が一面的であることを問題点として指摘したい。評者は,棚橋を“偽装転向”の形を装った非転向者と理解している。

*

歴史研究の基本は,文献・資料の分析をとおして問題の真実や真相を明らかにすることにあるだろう。そして文献・資料の不足を補い,問題の背景,経過,事実関係をより正確に把握するため当事者や関係者からのヒアリングは有効な手段であり,近年,とくに日本現代史研究において多用される傾向にある。

歴史として記録するヒアリングを行うためには,前提として,聞き手において入念な準備が

伴うはずだ。たんに当該の運動の回顧を願うのではなく,テーマを設定し,事前に細部の質問事項を話し手に伝え,もし関連の資料があればそれを送付して記憶を鮮明にしてもらうという準備作業は聞き手の務めであろう。

第4章に収録の金子の証言の正式タイトルは「金子洋文放談『種蒔く人』その周辺」である。金子の証言には前述した貴重な見解表明が含まれているものの,証言はやや定まりのないものとなっている。

『種蒔く人』の創刊を発案したのは小牧近江であるが,表紙にミレーの「種蒔く人」を選び,秋田・土崎の今野賢三と連絡をとって創刊の運びとしたのは金子であった(『種蒔く人伝』1984年)。金子は,東京版『種蒔き人』の編集・発行も小牧と協力して行い,また1922年3月に過激社会運動取締法案の反対運動を他団体に提唱するなど,種蒔き社の同人の中心に位置し,キーマンとなっていたのである。聞き手にはテーマを立てて,もっと系統的に,そして掘り下げて証言を得てほしかった。

(野添憲治著『労農運動に生きる 秋田の先覚者たち』能代文化出版社,2001年5月,189頁,1500円)

(よしだ・けんじ 法政大学大原社会問題研究所
研究員)